

生活者としての子どもたち

伊集院理子

二年間担任してきた子どもたちを、この三月に卒園させた。この二年間、私は、子どもたちと共に生活を作っていく、ということを意識して過ごしてきた。

登園するとすぐにそれぞれやりたいことを見つけ、個々に、または仲間と多様な活動を展開していく自由な遊び中心の生活の流れの中にも、片付け、お弁当、帰りの集まりなど、節目になる時があり、そういう時は、全

体の流れに沿う行動が子どもたちに求められる。また、数はかなり限られているが、時には、園外に出かけて行ったり、園内でも行事のためや、こちらがこういう事も体験してほしいと思つて意識的にいつもと異なる生活の流れを促す事がある。そういう場合も、日常とは異なるその日の流れを作り出し、それに沿う行動が求められる。

私は、自分のやりたい遊びをやりたいようにする日常生活の流れはもちろんのこと、いつもとは違う目の流れにも、子どもたちが主体的に関われるように、子どもたちが見通しを持って生活を作り出していけるようにと考えて、子どもたちに関わってきた。直前になって事細かく指示するのではなく、この後どういう事が展開していくのか、子どもたちが自分の中でイメージを持って生活していけるように、子どもたち自身が生活の流れを作り出していけるという意識が持てるように、全体の大まかに任せるようにしてきた。先手を打って、後は相手の出方に合わせていくという感じだろうか。これまでは、タイミングよく先手を打つことができず、直前になって色々指示する形になりがちで、心の準備ができていない子どもたちは、当然、こちらの言うことにすぐ従ってはいくれず、とはいえ、時間は押していて、どうにかして流れを作っていくかなくてはならない状況は切羽詰まっています、保育者が一人きりきり空回りして強引に流れを作っ

てしまうことが間々あった。そうになると、訳も分からず保育者の指示通りに動く、突然言われてもそんな事には従えないと自分たちのやりたいことをやり続けるか、どちらにしても、子どもたちが見通しを持って意識的に生活の流れを作り出すという部分が欠落してしまうことになる。自分のやりたいことを見つけそれを実現していく生活にも、全体の生活の流れや保育者の意図する事柄に取り組む生活にも、ともに、主体的に子どもたちが関わっていくようにしなければ、真の意味で、幼稚園生活の主体者として子どもたちを位置づけていることにはならないのではないか。そのためにも、全体の流れを作る時、こちらが意図する流れを作る時、子どもたち自身がその子ども自らの判断でその流れに沿う行動がとれるようにと考えて、子どもたちと関わってきた。その積み重ねの成果とも言えると思うが、卒園させた子どもたちの手応えとして、私の中に残っている一番の印象は、生活の流れがとても作りやすい子どもたちだったということがある。

そういう子どもたちではあったが、中には、安定した自分なりの生活をなかなか作り出せない子ども、全体の生活の流れにはお構いなしに行動する子どももいた。そういう子どもたちは、現われ方は様々であるが、幼稚園の生活にその子なりの確かな根っこを降ろせないで浮遊しがちな子どもと捉えることができる。そういう浮遊しがちな子どもを、幼稚園生活の中につかりと位置づけていくにはどうすればいいのか、そのことについて、ただ自分の中でもあまり整理できていないまま、私なりに考えてきた視点をあげていこうと思う。

仲間のなかに居続けること

〜Aの場合〜

Aは、遊びの中で友達と行き違いがあると、相手に対して声を荒げ威圧的に出てしまいがちなところがあった。そういうこともあり、Aは友達から仲間に入れてもらえないことがあり、その事をとても気にしていた。一緒に遊びたいと思っているグループの様子を少し離れて

見ていることがよくあった。そのグループの子どもたちはAの事をいつも排除しているわけではない様子なのに、「入れてくれない」と担任に訴えてくる事があった。担任が間を取り持って、折角遊びに加われても、そこに居続ける事ができずに、ふらつと抜けてしまう事が多かった。そのグループとの関わりだけでなく、誰かと仲良く遊んでいたかと思うと、次に見た時はその場から離れてしまっているのである。

五歳になってからは、大分仲間の中にすつと入れるようになっていった。大人数での集団遊びにもすつと加わってきて遊び始めるのだが、これといったトラブルがあったわけでもないのに、少しすると「やめる」と言っただけでいってしまう事があった。遊びに加われても、遊びの中に居続ける事がなかなかできないのだ。友だちとのやりとりでも、些細な事で自分が非難されたと思ひ込み、相手に対して大きな声で暴言を吐くところは少しずつ減ってきてはいたが、相変わらずだった。暴言を吐きながら、その場に留まることができずに、身体は少し

ずつ少しずつ後ずさりしていたり、暴言を吐き捨てて走り去っていったりした。遊びの中に居続ける事ができなかったり、暴言を吐いたり、仲間に対して威圧的に出たりするのは、Aのありのままの自分に対する自信の無さから来ているように思え、担任としては、遊びの中にAが居続けられるよう、友達との関係のなかで強がらずにありのままの自分を出せるように、励まし支えてきた。

五歳の後半になると、仲間の中に大分位置づくようになっていったが、ふらっと抜けてきてしまうところがまだあり、Aのそういうところは、Aの幼稚園での生活の中で存在基盤を確立しにくくしていると共に、仲間にとってもAのことを仲間と思いにくくしていた。

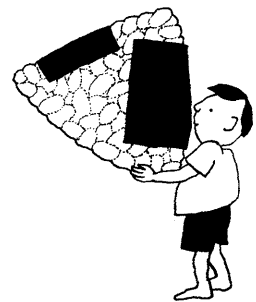
く B の場合く

Bも、ありのままの自分に自信が持てない感じで、何となくいつもおどおどしているようなところがあった。

友達が作っているものに刺激を受けて、心を動かして自分なりに始めるのだが、こそこそとおびなりに慌てて作っている感じだった。作ったものに対して、誰かに何

かを言われると、

Bの作品を否定するような内容ではないのに、注目されただけで、折角作ったものをぐちゃぐちゃにして



しまったりました。他の友達がしている事にはとても興味があり、面白そうだと自分から関わっていった。一緒に楽しむのだが、突然べたべたしつこく友達にまとわりつくようなことをしたり、友達との些細なやりとりによりがりに傷ついて、目に一杯涙を溜めて黙ったままその場を離れて、自分の中に引きこもってしまうことがあった。突然べたべたしてきたり、突然場を離れていってしまうBは、一緒に活動している子どもたちのなかに、いつも一緒に遊ぶ仲間としては位置づきにくいようであった。年中の二学期、Bは虫取りに夢中になり、Cといっしょに虫取りをするようになった。Cはとても穏やかな

性格で、自分を強く主張するのではなく、Bのペースに

合わせながらBと行動を共にし、多少しつこい事をされても、そんなBをもCは受け入れてくれた。行動を共に

してくれるCがいたからこそ、どんな自分も受け入れて

くれるCがいたからこそ、Bは日がな一日安定して自分

のやりたい遊びに集中できるようになっていった。二学

期中旬以降から、D、E、Fというメンバーが加わり、

五人グループで行動するようになっていった。Cのみで

なく、他の三人のメンバーにも受け入れられて行動を共

にできるようになっていった事が、Bの自分に対する自

信につながっていった。それからのBは、グループの友

だちとのやりとりの中で食い違いがあっても、その事で

必要以上に傷ついたり、自分の方から友達とのやりとり

から引きこもってしまう事がなくなつて、グループのメ

ンバーの中に居続けられるようになっていった。複数の

仲間を受け入れられているという事が、園生活の中で

Bの確かな基盤になって、仲間と共に自分たちのやりたい

遊びをしていく、園での生活を安定して組み立ててい

けるようにBは変わっていった。

仲間とは離れて自分のやりたい事を追求できる事

五歳児になって、子どもたち、特に男児は仲間と群れ

を成して行動する事が多くなつていった。一緒に活動す

る楽しさを十分味わいながら、リレー、泥警等の集団遊

びを自分たちだけで展開していけるようになっていっ

た。大人数で盛り上がってかなり長い時間取り組むのだ

が、その遊びが一段落した時、次の遊びが見つかるまで

の間、集団で浮遊する時間が長くなっていった。仲間と

世界を共有する楽しさを求めるあまり、それぞれのやり

たい事を追求していく生活が組み立てにくくなっている

ように思えた。そんな子どもたちに対して、遊びが停滞

している時には、みんなで作る事ではなく、一人一人や

りたい事を考えてみよう」というような働きかけをして

きた。そうすると、少し別々に行動するのだが、また少

しするとすぐ行動を共にしたがってしまうのである。仲

間と過ごす楽しさ、仲間の中に身を置いておく快適さ、

樂さを味わってきた子どもたちは、仲間集団に背を向けて、自分の世界を一人で追求する事に向かいにくくなっていった。仲間との生活だけではなく、時には自分一人の生活も、自分の思いのままに組み立てていけるようになっては、生活の主体者とは言えないのではないか。仲間と一緒にの世界と、自分一人の世界を自由に行ったりきたりできるような生活を、それぞれがつくりあげていけるようにしていかなくてはならないのだろう。

行動を完結していく事

Gは、個性的というか、マイペースというか、周りで展開している事には我関せずという感じで、常に自分中心の世界に生きていて、全体の生活の流れにとっても乗りにくい子どもであった。発想がユニークで色々な事に心を動かし取り組むのだが、興味が移ろいやすく、今ここにいたと思ったら、次の瞬間には別のところへ移動し、違う事を始めているという感じに刹那的に行動する事が多かった。担任としてはGの行動をできるだけ細かく把

握しようと努めていたが、どうしても担任の視野から抜け落ちてしまいがちであった。片づけの時などは、ぎりぎりまで自分のしたいことをやり続け、みんなが片付けが終わった頃、ちゃっかり帰ってくるような子どもであった。友達関係においても、自分中心のところがあり、被害者意識が強く、ちよつとした事で泣いてさわぐことがあった。その時の状況を客観的に把握しようとするのではなく、一方的に「いじめられた」とか、「たたかれた」などと言って泣いて大騒ぎするのである。そういう場合、担任は、Gをひざに乗せたり、Gの傍らに寄り添いながら、Gの言い分をまずよく聞いて、Gの気持ちを落ち着かせ、それから、できるだけ客観的な事態の把握をGができるように、相手の立場、相手の気持ちにも気づけるように促してきた。Gは、担任に受け止めてもらうと、泣き止んで落ち着きを取り戻して、自分から立ち直っていった。気持ちの切り替え、立ち直りは早い方で、「さつき鳴いてたからすがもう笑った」という感じに、今展開していた事がなかったかのように、全く違

う事を始めたりすることがあった。担任としては、Gに寄り添いながら、少しずつ周りの状況にも気づいて欲しいと思つて一生懸命伝えている事が、Gには響いていかないうちに、次の展開に流れていってしまう感じがした。担任としては、Gの個性的なところ、ユニークな感性、発想などを大事に育てていきたいという思い、頭ごなしに型にはめるような事はしたくないという思いがあり、ありのままのGに寄り添う事を第一に心がけてきた。しかし、ある時、その時々Gの興味、Gの自分中心の論理に流されていて、Gの行動が一つのまとまりのあるものとして完結していったくない事に問題があるように思えた。Gの場合は、寄り添う事ばかりではだめで、向き合つて一つ一つの事を一緒に完結させていかなければならないという思いに至つた。そういう思いに至つたのが、年長の半ばで、志半ばにして、Gを卒園させる事になつてしまった。

Gは色々な事をしているのに、幼稚園で確かな生活を送つているという感じが、周りから見ても、G自身にお

いても成立しにくかつたのではないだろうか。自分の論理だけではなく、人の論理、集団の論理に向き合つて、一つ一つの行動をまとまりのあるものとして完結させていく事を生活の中で積み重ねていく事が、真の生活者になりえるためには大事なのだと思う。

まとまりのない事をいろいろ書いてきたが、子どもたちを確かな生活者として位置づけるためには、相対するように思える事を共に達成していくことがポイントなのかもしれない。全体の流れに沿う生活と自分のやりた事を追求する生活、仲間との生活を充実させる事と一人でも自分の生活を自分で組み立てていけるようになる事、子どもに寄り添う事と向き合う事、など、どちらか一方ではなく、双方を柔軟にバランスよく展開していく事が大事なのではないか。

これからも生活者としての子どもたちと、生活を共に作り出していく事をさらに考え続けていきたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)